

AMDAダイジェスト

発行：1996年6月

発行元：〒700岡山市栢津310-1

AMDA (アジア医師連絡協議会)

TEL086-284-7730 FAX086-284-6758

InterNet : <http://www.amda.or.jp>

編集者：田代邦子、飯島恵美

国際貢献に夢を馳せて・・・

AMDA国際医療情報センター所長・AMDA副代表
小林米幸



小学校の卒業アルバムに「ぼくは、アルゼンチン大使になる」と書いてある。どうしてアルゼンチンなのか覚えがないが、そんなころから海外志向が強かった私である。中学生の頃は家庭教師の東京外国語大学のお兄さんのインドの話に夢が膨らんだものだ。高校生になって進路に悩んだ。酒造会社を北海道で経営していた父方の祖父のもとに帰って同族会社に入りたくない

という強い気持ちから自立のために医学部への進学を選んだ。祖父は激怒したが授業料だけは出してくれた。海外への夢はその時に捨てたつもりだった。医学生の時、熱帯医学研究会に所属していたことがあるが、こづかい稼ぎのため週6日も家庭教師をして足が遠のいてしまった。卒業後、外科医となった私はその修練に日常の時間の全てを奪われる状態となってしまった。だが相変わらず何をするにも海外へ目が行ってしまう。休みには独り旅に出掛け、学会発表もわざわざアジアでの学会を選んで出掛ける始末であった。

6年間の慶応大学病院での訓練期間が終了し、晴れて一人前となり、第一線病院に派遣される頃、母校がスリランカの基幹病院の建設、運営に人材を出すことになった。真っ先に希望を出したのだが当時の主任教授に蹴られてしまった。いつかチャンスがあるだろうと腰掛けに赴任した病院で私はインドシナ難民の人達と運命的な出会いをすることになる。当時、結婚し子持ちとなった私にとっては三たび、海外は遠いものとなった。少なくとも私はそう思い込んでいた。だが病院でインドシナの人達と接点を持ち言葉のわからない人達が医療を受けることの難しさを痛感するにつれて、日本にいても国際貢献できるのではないかという気持ちが強くなってきた。そのころ神戸での日本国際保健医療学会の会場でAMDAのパンフレットを何気なく読んだ。全身に震えが走り、迷うことなくAMDAに入会した。今から8年前の話だ。

勤務医で専門医の道をひたすら進んでいた私だがある日、突然、開業したくなった。自分の目指す医療を実践したかったからである。それは外国人も地域の住民として診ていくという国際クリニックの開設であった。小児科医の妻を半ば強引に説得し、それから4ヶ月後に開業にこぎつけた。時はバブルの時代、海外から多数の外国人が押し寄せ、外国人が関連した医療問題が社会問題化し始めた頃であった。この経験がAMDA国際医療情報センター構想につながった。現在、同センターは東京と大阪にオフィスを持ち、年間4千件の外国人からの医療相談電話に事務局員8人、通訳80人が毎日5ヶ国語で対応し、東京都の委託事業を受けるまでに成長している。開業医など海外へ出掛けることが困難な人でも国内にいてセンターを通じて国際貢献できることを私は証明したかったし、それが、AMDAの活動の底辺の拡大につながると考えていた。今、その考えは間違っていないと思う。

地域防災民間緊急医療ネットワーク構想

(国際医療協力 vol.19No.1 より)

AMDA代表 菅波 茂

今月17日で阪神大震災1周年を迎えた。悲惨な出来事であった。AMDAも長田区役所中央保健所を活動拠点として救援医療活動に従事した。多くの教訓を得た。阪神大震災のキーワードは下記の3つであった。

- 1) 日本中のみんなが何かをしたかった
- 2) NGOが日本国内で初めて社会的認知を得た
- 3) 海外百数十ヶ国から支援あるいは支援の申込があった

そして「災害とボランティアはあたりまえ」が国民的コンセンサスになった。次の来るべき災害への対策が官民ともに大きな課題となっている。AMDAはいかに動くべきか。阪神大震災の場となった神戸は幸いにして本部のある岡山県の隣であったので満足のできる救援医療活動が可能となった(詳細は「とびだせAMDA!!」を参照いただきたい)。日本全国各地で自然災害が発生しても対応できる能力が求められている。さらに自然災害に対する緊急医療活動には厳密なタイムテーブルにもとづいたシステムである。それは3:3:1の原則である。

最初の3は活動拠点、通信、輸送の確保である。活動拠点としては行政との接点となる保健所が望ましい。通信はインマールサットのレベルまで必要とされる。輸送手段として航空機の使用は常識となった。次の3は人、物、金である。多ければ多いほど望ましい。余って当り前の感覚が欲しい。節約は敵である。人は「緊急救援ボランティアの3条件」を理解の上参加して欲しい。それは現場は混乱状況であるとの認識、劣悪な生活環境に対する忍耐そして自ら積極的に仕事を探す意欲である。最後の1は後方支援体制である。これがなければ効果的な救援活動の持続は不可能である。

3:3:1の原則をいかに実現させるか。これが1996年のAMDAの挑戦課題でもある。「72時間ネットワーク」は活動拠点における前線事務局の役割を果たす機能である。阪神大震災における長田区での活動経験と共に汗を流した信頼感を基盤にしている全国ネットワークである。「地域防災民間緊急医療ネットワーク」は阪神大震災で被災しながらも重傷患者をはじめとした幅広い診療活動を実施した民間医療機関を活動拠点にすることを想定した全国ネットワークである。基本構成メンバーは私的医療機関の集まりである全日本病院協会、日本医師会とAMDAの3者である。役割は下記の如くである。

- 1) 全日本病院協会：相互扶助と社会貢献。活動拠点としての場と機能を提供



2) 日本医師会：日本レベルおよび地区医師会を通しての地方自治体レベルの調整

3) AMDA：後方支援体制と医療ボランティアの派遣

この基本構成と役割の上に日病や日赤に後方病院の機能をお願いすることになる。通信と輸送の手段が付加されるのは当然のことである。

AMDAは「72時間ネットワーク」と「地域防災民間緊急医療ネットワーク」の設立をもって日本中どこで自然災害が発生しても原則として緊急医療活動が展開できることになる。自然災害に対する緊急医療活動のキーワードは「スピード」と「人間関係」である。バージョンアップは絶えざらず前向きな努力を必要とする。阪神大震災の一周年を迎えてAMDAは緊急救援医療NGOとしての機能を強化して国内外を問わず世の中のお役に立てるよう一層の努力をすることを1996年新春の目標としたい。

中国雲南省大震災緊急救援プロジェクト (国際医療協力 vol.19No.2 より抜粋)

[概要] 2月3日午後7時14分(日本時間午後8時14分)中国雲南省の北西部でM7の大地震が発生。DHAの情報によれば、死者は228名、負傷者は14,000人。また家を失った人は30万人に上る。

[AMDAの動き]

2月5日、第一陣3名が関西空港よりキャセイ航空503便10時30分発で香港に向け出発した。香港で中国のビザを取得後、広東省の広州に入り、広東省人民病院の医師1名と合流。

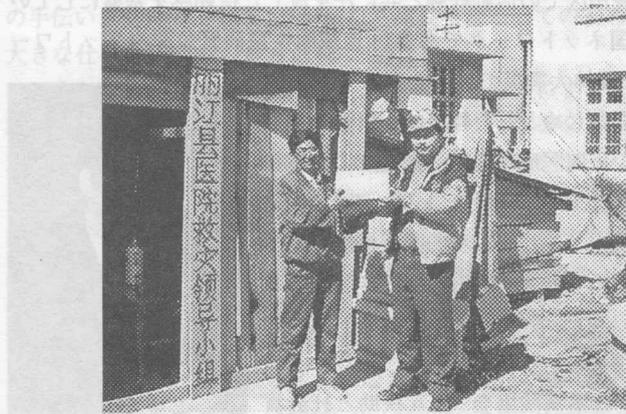
2月6日、日朝、現地時間午前9時30分昆明に到着。しかし、被災地に入る許可が中国政府よりおりず、重傷患者が搬入されている昆明の病院数カ所で後方支援(重傷患者に対し診察の助言)を行っている。

2月7日、第一陣が持って入った医療品40キロと中国で購入した700キロ(100万円相)は雲南省衛生庁を通し、政府の飛行機で被災地に運ばれる。被災地の病院は被害が大きく、全く機能していない状態。医薬品、医療機材の必要性が叫ばれる。

第二陣は、中国東方航空516便13時30分関西空港発で上海に到着。上海医科大学の医療チームと合流。

2月8日、第二陣は昆明に入り第一陣と合流の予定だったが、北京政府より許可がおりず、上海で「現地入りの許可」を得るため調整中。

第二陣が持って入ったWHO Emergency Kits830キロについては被災地に送るべく、上海で手配中。本部では医療品、医療機器、防寒具、毛布の寄付を企業や各関係団体に呼びかけ、2月11日、エア・テイナをチャーターし昆明まで上海経由で搬送。



救援物資を届ける笹山調整員

中国雲南省大地震の被災者救援活動の参加報告 (国際医療協力 vol.19No.3 より抜粋)

1996年2月25日 汪達紘

私は、AMDA雲南省震災救援の第二陣の隊員として派遣され、チーム一同5人が上海経由で雲南省に入った。

計画どおりに行けば、上海で上海医科大学付属中山医院の救援チームと合流して、雲南に入るはずだったが、中央政府の指示によって、実現できなかった。このことについて、中国の背景状況を知らない人には非常に理解しにくいことだが、中国人としての私には、さほど難しくなかった。社会主義の国家として歩いてきた中国では今までの災害救援は、すべて中央政府から一括で管理、指揮されてきた。ボランティアや非政府組織の勝手な行動は許されなかった。民間レベルでのボランティア意識もあまりなかった。聞いた話によると、上海チームの結成は、実にAMDAの救援活動の影響を大きく受けたようだ。外国からの民間団体が救援のためにわざわざ来ることに感動し、中山医院の医師たちは積極的に努力した結果、30人の救援チームを結成したそうだ。そして上海の民放局もこの影響を受けて、救援物資を組織して、我々が持って行った救援医薬品とともに、中国の東方航空会社に頼んでただで雲南まで届けてくれた。この意味から言えば我々の上海経由が非常に良い影響を残したようだ。

我々は、雲南に入った時、すでにAMDAの第一陣の人たちは現地の政府と連絡を取って救援活動を進めていた。

約8ヶ月の間に雲南省で3回大きな地震が発生した。救援の人員はほとんど軍人が担当したが緊急救援物資の不足がかなり目立っているようだ。2月3日麗江、中甸、大理及び怒江の大地震発生後、各国からかなりの救援物資が届いた。得に、AMDAから非常に不足している緊急用医薬品が大量に送られてきたことに、省政府の人たちは非常に感動し、気持ちよく受け入れた。岡山発のチャーター機の中国人のパイロットは大勢の日本人のボランティアたちが岡山空港で積み込む作業の風景を見て、涙が出るほど感動したことを昆明空港で私たちに話した。時間イコール金銭の国でこの風景が見られたのは非常に感銘深かったようだ。こういうことを見て、聞いて、ますます自分たちがやっていることの意味を感じた。

雲南省大震災緊急救援プロジェクト協力お願い

今後の救援活動としてAMDAは下記のプロジェクトを計画しました。

- (1) リージャン県小学校再建プロジェクト
- (2) リージャン診療所再建プロジェクト
- (3) 趙君支援プロジェクト

リージャンは今回の地震の震源地で、最も被害の大きかった地域です。また、趙君(4才)は地震による火災で両親を亡くし、自身も下半身火傷と左足骨折で重体。現在は快方に向かっていますが、今後5回もの手術が必要といわれています。

<プロジェクト募金先>

郵便振替 01250-2-40709

加入者 AMDA

通信欄に (1) 中国学校再建 (2) 中国診療所再建 (3) 趙君支援のいずれかを明記して下さい。



ザンビアの子供達

ザンビア-プライマリーヘルスケアプロジェクト調査団報告 (国際医療協力 vol.19No.4 より抜粋)

岡山大学公衆衛生学AMDA日本支部副代表・山本秀樹くはじめに> ザンビアは、南部アフリカの内陸国でかつては銅の生産で繁栄していたが、銅の価格の低迷で経済的には苦しい状況が続いており累積債務の蓄積のため世界銀行の構造調整策を受け入れるほどである。保健医療面でも、経済状況が苦しいため都市部に人口が流入しそれに伴う生態系に変化のためにマラリアが流行し、エイズの感染者の数も増大している。そこで、プライマリーヘルスケア改善のための要請がザンビア政府から日本へと出された。

ザンビア・ルサカ市周辺の都市住民の健康状態改善のため、日本政府がプライマリーヘルスケアプロジェクトを実施することとなり、フィリピンにおける母子保健プロジェクトに続きJICAとAMDAが合同で援助を実施することとなった。1995年4月にはザンビア国保健省のアドバイザーとして吉田修医師がAMDAから1年間派遣された。そして、このほど実際の援助の計画を策定するために、菅波代表を団長とする、事前調査団が派遣されプロジェクトの概要についてカウンターパートのザンビア保健省、ルサカ市などと合意がとれ調査団と調印にいたった。本年8月には正式に開始するためのR/Dミッションが派遣されいよいよ、プロジェクトが始まる予定である。

<調査団員>

団長：菅波茂 (AMDA代表)
高橋央 (長崎大学熱帯医学研究所、AMDA日本支部副代表)
山本秀樹 (岡山大学公衆衛生学、AMDA日本支部副代表)
石井羊次郎 (JICA 医療協力部)
雑賀葉子 (JICA 企画部環境女性課)
広内靖世 (グローバルリンクマネジメント株式会社)

<プロジェクトの基本方針>

1. 適切な患者紹介システムの確立
2. ヘルスセンターにおける機能強化; 栄養・感染症の診断機能の強化と訓練
3. ヘルスポストにおける機能強化; 住民参加の促進—「相互扶助」の活用。栄養・感染症、セルフケア能力の向上

<実施検討中のプログラム>

薬生協の導入・コミュニティレベルでのマラリア対策プログラム・廉価な鍼灸治療の普及と疼痛患者の治療・コミュニティレベルでのHIV/AIDSに関する啓蒙活動・コミュニティレベルでのAIDS患者の在宅ケア・HIV陽性者の結核予防プログラム・University Teaching Hospital 小児科が行うOutreachプログラムの支援・District Health Management Teamが行うreferral systemの支援

これまでの技術協力と異なりJICA、AMDAに加えて地方自治体、岡山の地域住民が協力して本プロジェクトを支援する予定である。

レバノン緊急救援活動の報告

(国際医療協力 vol.19No.5 より抜粋)

医師 吉田 修

【期間】4月24日～5月8日

【メンバー】吉田 修 (外科医師)・岩本 功 (内科医師)・松浦多賀雄 (外科医師)・清水美恵子 (看護婦)

【現地協力組織】レバノン赤十字

【派遣までの背景】レバノン南部のイスラエル占領地区でのヒズボラのゲリラ活動に対する報復として、4月11日イスラエルはレバノン南部の広い地域に陸海空から無差別砲撃を開始した。その地域の住民約40万人は、サイダやベイルート周辺に避難した(6万人は取り残されたと言われる)。在日レバノン大使より、避難民救済の要請がAMDAにあり緊急救援チームの派遣となった。

【日本政府の協力】出発前より迅速な協力をいただき、スムーズな緊急救援活動が可能となった。

- 1) 外務省経済協力局民間援助支援室より資金援助
- 2) 厚生省大臣官房国際課よりWHO緊急用医療品キット供与
- 3) 現地日本大使館の便宜供与

【レバノン南部の状況】停戦の3日後、レバノン南部に入る。サイダ、ティールはほとんど砲撃を受けていない。しかし、この間の幹線道路は戦艦からの道路封鎖を目的とした砲撃にさらされた。ティールから東南部の10ヶ所の村で医療活動を行ったが、かなりの家が砲撃で破壊されていた。一番酷い村で10%ほどの家が被害を受けていたであろうか。2つの診療所は破壊されていた。狙ってやった事と思われる。あるおばさんが壊れた家の前で泣いている。全壊ではないが家の中はどの部屋もめちゃめちゃである。爆弾の大きさは色々あったようで、一発で全壊になるものから、壁の一部が崩れる程度のものまでである。道路も谷を通るところが狙われている。直径20～30m程の穴が多いところで1ヶ所に10個以上あいている。しかしそれも既に復旧している。

【レバノン赤十字について】イスラエルの攻撃が始まって2週間後、停戦の前日にベイルートでの彼等の活躍ぶりを見たのであるが、実に素晴らしいものであった。ごく短期間の内に2千人以上のボランティアを動員し、組織的に統制が取れていて、フィールドとの情報交換もうまくいっている。学校に避難民を収容しているのであるが、生活用品等も適切に配給できたようである。学校への巡回診療は既にボランティアの医師達が行っていた。また、市内に60ある赤十字の診療所も平常時の数倍の仕事をしたようである。通信は、無線機と携帯電話を使っていた。

【おわりに】改めて、すべての生活の基本は「平和」であると実感する派遣であった。正直いって、長い間紛争に明け暮れるアラブのレバノン人とはどんな人達だろうという思いで行ったのであるが、そこにいた人達は心優しく暖かく、誰もが心から平和を望んでいた。内戦で疲弊しこれから復興だということ、軍事大国に付け入られたという印象であった。問題は複雑であろうが、一日も早く真の平和が中東に来る事を祈りたい。



AMDA CLUB (関東・関西) が結成されました!

(国際医療協力 vol.19No.5 より)

◆「AMDA CLUB 関東について」 岩岸 徹

1) 設立目的

AMDAの各プロジェクトや国際貢献活動を支援し、NGO活動やボランティアに興味や関心のある学生や社会人を実際の活動参加へとつなげるため。AMDAの応援団の組織。

2) 活動予定

- 1.雲南省大震災記録写真展示企画(5、6月中三鷹市コミュニティプラザ)
- 2.雲南省学校再建スタディーツアー参加(8月)
- 3.雲南省学校再建及び四川省雪害被災者の家畜支援のためのバザーに出店(9月22日王子五丁目団地内)
4. AMDAとAMDA CLUBの活動展示会(帝京大学学園祭内10月下旬~11月上旬)

◆「AMDA CLUB 関西について」 中野 耕二

1) 設立目的

私と岩岸は4月初旬AMDA岡山を訪れました。そこでAMDAのスタッフと話し、事務機能を目のあたりにするうち、ネットワークの軽さ、世界にも堂々と通じる災害救援体制、活動の基盤に相互理解を据える理念、オープンな態度に惹かれAMDA CLUBなるものを結成しました。

しばらくは中国雲南省地震の写真展を中心にして活動しますが、何をやるのか、何が出来るのか、そして組織的な面でもまだまだ話し合う必要があります。小さな力を集めて少しでも世の中の役に立てればいいな、そして何か自分たちの身につければいいなと考えています。

2) 活動報告

1. 4月28日(日)名古屋の同朋大学の阪神・淡路大震災チャリティバザーにて第一回中国雲南省地震写真展開催。
2. 5月15~31日淡路島北淡町民センター2フロビーにて第二回写真展を開催。

AMDA 高校生会活動報告

(国際医療協力 vol.19No.5 より)

私たち高校生会は1995年9月に同じ中学校出身の高校1年生5人でスタートしました。私たちの最初の仕事は、事務所の掃除、お茶くみ、皿洗いなどの手伝い程度の仕事でした。そして荷物運び、倉庫の整理などの簡単な仕事をしていくうちに、何か月か過ぎました。そのうち日頃の活動に加えて、メンバーをアフリカ、旧ユーゴスラビア、アジアなどの地域担当を決め、AMDAの各地域のプロジェクトスタッフに直接ついて勉強したり、活動の手伝いをしたりもしました。私たち高校生会としての初めての大きな仕事は街角での募金活動でした。

こうしてみんながやる気になり、現在では10人にまで人数も増えました。今年4月新学年になり、まとまった仕事をしたいと思っていたところ、中国雲南省大地震の被害で学校をなくしてしまった子ども達に新しい学校を建てようという「雲南省学校再建プロジェクト」が始まっていたので、このプロジェクトに参加し、高校生会独自の活動をはじめました。現在は岡山県下の小、中、高校生に学校再建の募金を呼びかけているところです。

この活動を通して岡山県下の高校生がボランティア活動に興味をもち、力を入れてくれるようになればとも思っています。

山崎将臣 田代寿安 寺坂真人 岡田光史 金子大助

AMDA カード・テレホンカードのお知らせ

この度、全日信販よりAMDAカードが発行されました。カード使用手数料の一部がAMDAに寄付されます。お問い合わせは全日信販のAMDAデスク (tel) 086-227-7161まで。

また、AMDAテレホンカード(50度数/1000円)も発売中です。ご希望の方はAMDA経理の羽川まで。



AMDA カード申込書とAMDAテレホンカード

AMDA 近況

- '95.12: 「アジア・アフリカ多国籍医師団」(AAMMM) 構想を提唱
- '95.12: 「国際貢献における関西空港の役割」会議開催/大阪
- '96.1: インドネシア中央スラウェシ島地震救援プロジェクト開始
- '96.1: 第54回山陽新聞賞受賞
- '96.2: 中国・雲南省大震災緊急救援プロジェクト開始
- '96.2: 「国連ボランティア計画 (UNV) ワークショップ 岡山」後援
- '96.2: 「地域防災民間緊急医療フォーラム」開催/神戸
「地域防災民間緊急医療ネットワーク」設立
- '96.2: 中国・四川省雪害緊急救援プロジェクト開始
- '96.2: インドネシア・ビアク島大震災緊急救援プロジェクト開始
- '96.3: 中国新疆ウイグル自治区地震緊急救援プロジェクト開始
- '96.3: 全日信販よりAMDAカード発行
- '96.4: レバノン被災民緊急救援プロジェクト開始
- '96.5: バングラディッシュ竜巻緊急救援プロジェクト開始
- '96.5: ウガンダ地域保健プロジェクト開始
- '96.6: ボスニア難民被災民救援プロジェクト開始
- '96.6: AMDA 総会

編集後記

・AMDAは共に活動する人々を歓迎します。新しい出会いや発見があります。あなたも見つけにいらっしゃいませんか。(田代)
・最近足に怪我をして、親身になって下さるお医者様の有り難さを再確認しています。(飯島)